

二度死んだら、三度目はサーヴァントでした

paddy

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世は普通の男で、今世では女性に転生した主人公が、二度目の人生を満足して終えたはずなのに、なぜかサーヴァントになってしまった。

これはそんな主人公が、戸惑いながらもサーヴァントとして様々な戦いに巻き込まれる話。

初投稿です。

ノリと勢いに任せて書いたので、思いつき次第書いていこうと思います。

なるべく更新していくこうと思っているので、ゆっくりと楽しんでもらえると嬉しいです。

封鎖終局四海オケアノス

目

次

プロローグ
第1話
第2話
第3話
第4話
第5話

34 26 19 13 7 1

封鎖終局四海才ケアノス プロローグ

「後はお任せ下さい、女王陛下」

私はその言葉を聞いて、

——ああ、やつとすべてが終わつたんだ

本当にそう思わずにはいられなかつた。

いやー本当に良かつた良かつた。私が一般人だつた男から王女として転生しておよそ七十年、ここまで来るのに本当に長かつたなあ。幼少期は不幸なことが続いたし、女王になつたらなつたで問題か厄介事しかなくて、前世の自分がどれだけ楽に生きていかかを痛感したし。時には自らの手で非情な判断を下さないといけない時もあつたけれど。

それでも、昔から支えてくれた親友や忠臣たち、何より守るべき国と国民たちのためにも途中で折れることもできなくて、何とか最後まで走り続けることができた。

今思えば本当によく最後までできたな私。

だからもう何も残すことはないし、後のこととはすべて皆に任せて私ももう休もう。

目を閉じれば、これまで歩んできた波乱万丈な人生がおぼろげに浮かんでは消えていく。

次こそは、どうか安らぎのある人生が送れますように……。

気がついたら、私は知らない森の中に立っていた。

「——えつ？」

思わず口から声が漏れてしまつた。だつておかしいじやない。私はさつき死んだはずなのに、こんな来たことも見たこともない森の中に突つ立つてゐるはずがないし。それともここは死後の世界とでも言うつもりか。確かに死ぬ間際に次の人生を望んだけど、こんなところでは安らぎどころか明日の自分の未来すら危ないじやないか。

「何ですか、そんなに私が悪いことをしましたか。確かに女王としてはちゃんとできていなかつたかもしれないんですけども、私は私なりに頑張つたはずなのに。ていうか元男が女王として振る舞つただけでもせめて評価してくれてもいいじゃない！」

ハア……ハア……ハア……

とりあえず頭の中でも思つたことを言えたし、改めて周りを見て
も、木、木、木、木……もう木しかないじやない。

とりあえず今私がどういう状態なのかもそうだけど、ここがいつたいどこなのかも調べないとね。……はあ、それにしても叫びすぎて喉も乾いたし、どこか水が飲める場所はないのかしら。

あつ、あつたわね……。こんなに早く見つかるもののかしら。ま

あ昔から運だけはよかつたしね。てか運がなかつたら今頃私は牢獄の中で女としての地獄を味わうか、王位を奪われて処刑コースだつたし。今思い出してもヒヤヒヤするわ。

……ふはあ。それにしてもやつぱり自然の水は冷たいし上手いわね。生きていた時じやあこんなことも中々出来なかつたし。そういうえば今の私つてどんな感じなんだろう？ さすがにヨボヨボなおばあちゃんつてことはないと思うけど、まあおばさんぐらいかな……。そう思いながら私が水面を覗いて見ると、

「——ええつ？」

もう一回口から声が漏れてしまつた。

腰まで届く金褐色の髪、傷一つない白い素肌、メリハリのある体つきに赤を基調としたドレスを着た私。

だつてどう見ても若返つてゐるし。思わず何度も見返すけれども、結果は変わらず若い私のまま。

えつ、なに私若返つたつてことは過去に戻つてきたつことになるの……。でもこんな所知らないしなあ。

「ぐつ……うう……」

痛い痛い痛い！ 急に頭の中に何か流れ込んで来たんですけど。これいつたいどこから流れてくるのよ……もつと相手のことを思いやりなさいよ！

やつと治まつてきたけど……ははあ、なるほどね。どうやら今の私はライダーのクラスのサーヴァントとして存在しているらしい。

サーヴァントとは、英雄が死後、人々に祀られて英靈化したものを、聖杯の膨大な魔力によつて使い魔として召喚したものらしい。

「英靈の座」に存在する本体のコピーが召喚され、召喚されるサー

ヴァントは七つのクラスに当てはめられるようで、クラスはそれぞれ、セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの七つで、稀に例外のクラスのサーヴァントも存在するみたいだ。

今私のクラスはライダーだけど、ライダーのクラスは騎兵ということ。「乗り物に乗っていたという伝説」があればいいらしい。でも私は、特に乗り物に関した伝説もないし、有名な乗り物がある訳でもないので、なぜライダーのクラスに当てはめられたのか。考えても理由は分からぬし、それよりも、

「とりあえず、ここはどうなんでしょう」

サーヴァントとして存在していることも、若返つてることも一先ずおいといて、なんで私がこの場所に呼ばれたのか、そもそもここがどこなのかは結局分かっていないのよね。

——イン、キイーーーン

今遠くの方からかすかに金属音が聞こえてきた。

「誰かが戦っているのかもせんね」

どうしようかなあ。確かにこのまま分からぬよりかは、人に聞いた方が早いけど戦っているしなあ。私は武器持つてないし。でもこのままでは埒が明かないし、とりあえず音のなる方へ進みましょうか。

——キイン、キイーーン

段々音の場所へ近づいて行けてるみたいね。

私は音を立てないように慎重に足を進めながら、隠れられる場所を探した。近くにあつた茂みにそっと息を潜めて、体を小さくなるように丸めて耳をすませる。

「……………」

「……………」

「……………」

どうやら戦闘は終わつて、何か話しているみたい。これならここでの話を聞くこともできるかもしないし、少しづつ体を近づけて行く。

——パキッ

「あつ」

「そこにいるやつ、出てきなつ!!」

何やつてるのよ私は。足下にあつた枝を気づかずに踏むなんてただのマヌケじゃない。でも今で向こう側にも気づかれてしまつたみたいだし、観念して出ていつた方がいいかもしないわね。

私は一応両手を上げながら茂みから出ていく。少しでも生き残る可能性があるんだといいんだけど……。

茂みから出てまず目に映つたのは、三人の人物がこちらを見ている

姿だった。

黒髪に青い瞳で戦闘服を着た少年、露出の多い鎧を纏つた巨大な盾を持つ紫髪の少女、そして赤いフロックコートを羽織り、頭に海賊帽を被つた顔に傷のある赤髪の女性。

「――嘘ですよね」

私は最後の女性を見た瞬間思わず声が出てしまった。まさかこんな所で会えるなんて思わなかつた。もう二度と会えないはずの、私が最も頼りにしていた人が目の前にいたのだから。

私は一歩ずつ、ゆっくりと彼女の方へ足を進めて行く。周りにいる人たちが何かを言つてゐるみたいですが、私の耳にはまったく入つてこなかつた。

目覚めてからどこかも分からぬ場所で、誰にも会えないと思つていたのに、まさか彼女に会えるなんて。

「ドレイク!!」

思いがけない出会いに私は駆け足になつて、彼女の名前を呼びながら抱き着いた。

第1話

私が勢いよく抱きつくと、ドレイクはそんな私をしつかりと受け止めてくれた。

私は抱きついたのをいいことに、彼女の大きくて柔らかい胸に顔を埋める。生きていた時は周りは大臣か変態の男ばかりで、中々同性と関わる暇もなかつたし、関わる女性はほとんど敵だつたから、彼女にこうするのは数少ない癒しの一つだつたのよね。

だから久しぶりに触れた彼女の胸は、柔らかいし、懐かしい匂いがして、元男としてもやつぱり最高ですね。

「アンタ、もしかして姫様かい？」

私が彼女の胸を堪能していると、頭の上からそう問い合わせられた。私のことが分かつてくれたんだと思うと、なんだか嬉しくなつて答える代わりにさらにグイグイ顔を押し付けると、

「やつぱりそうかい…………姫様、久しぶりだね」

彼女のその声を聞いた時、私は泣きそうになつた。
どこなのかも分からぬい場所で、一人しかいないと思つていたのに、二度と会えないと思つていた貴女に会えたから。

「あの…………すみません」

「ひやつ!?

今私の顔を見せたくないくて、顔をそのままにしていると、突然横

から話しかけられてので、思わず声が上擦つて出てしまつた。

恐る恐る顔を上げると、鎧を纏つた紫髪の少女がこちらに話しかけ

てきたのが見えて、私は全部見られてたのかと思うと急に恥ずかしくなつてすぐに彼女から離れた。

「すみません。お見苦しいところをお見せしました」

「いえいえそんなつ。わたしたちは何も見てませんよね、マスター」

「うん。俺たちは何も見なかつたよ」

分かりきつた気遣いですけど、今の私にはとてもありがたい。
よしつ。何とか落ち着けたし、改めて周りの状況を確認すると
……。

マスターと呼ばれた少年と鎧を纏つた少女の後ろには、赤い外套を着た弓を持つ男や旗を持った金髪の少女、赤いドレスを着た金髪の少女など、明らかに普通の人じやないと分かる人（？）が何人かいるし、さらにその周りを海賊たちが逃がさないように囲つていた。

「その……貴女は一体誰なのでしょうか？」

「そうですよ船長。キャプテン その女は一体誰なんですかい？」

「ああそりゃ。お前ら一度も顔を合わせたことがなかつたね。姫様も自己紹介した方がいいんじゃないかな」

「ええ、そうですね。彼らとは話す機会もありませんでしたし、そろそろ海賊彼達とマスター達にも自己紹介しないといけませんね」

確かにそれもそうだわ。自己紹介しなければ相手も分からぬし、逆にこつちから聞くのは今の状況じゃよくないしね。私は改めて彼らの方に向き直ると、

「どうも皆様こんにちは。私はライダーのサーヴァント、真名はエリザベス一世です。英国の女王を勤めていました。よろしくお願ひしますね」

ちょっと簡単にし過ぎたかもしない。でも自己紹介つてだいたいこんな感じだつたはずだし、大丈夫だよね。でもしようがないじゃない、今までこうやって自己紹介する機会もなかつたし、男だつた時のやり方なんてもう忘れてしまつてるし。私はそんな感じで自問自答しながら、恐る恐る彼らの方を見ると……、

「マスター!! 彼女はあのエリザベス一世ですよ。アルマダ海戦でスペインを破り、宗教対立による国の分断を回避し、イギリスの経済も権利も回復させた、まさに大英帝国の栄光を築いた女性です。他にも……」

「マシユ、マシユ、ストップストップ。彼女も驚いてるよ」

「ああすみません。つい夢中になつてしまつて……。改めて、わたしはカルデアという機関に所属するマシユ・キリエライトといいます。こちらはわたしのマスターで、先輩でもある藤丸立香です」

「藤丸立香です。カルデアでマスターをしています。よろしくお願ひします」

「いらっしゃりそよろしくお願ひしますね。マシユ、藤丸」

ふふつ、まさかこんなにも私のことを知つてもらえてるなんてもう、照れますね。顔が段々赤くなつてのを止められません。

自己紹介を終えた私は、今どういう状況なのかを確かめる為にも、彼らから現状を聞くことにした。

「それで……その、カルデアという機関がなぜこんなところにいるのでしょうか？」

「……はい。わたしたちはこの時代の異常事態を修正するため、さる場所から送られた者です」

「……はあ」

「そこでわたしたちはこの時代の異変の修復に協力してもらおうと、さつきまでドレイク船長に頼んでいたところなのです」

「なるほど。ではさつき聞こえてきたあの音は？」

「多分それは、わたしたちの力を証明するために、ドレイク船長と戦つていたときの音ですね」

「なるほど。……あの……それで結局どうなったのですか？」

「はい。ギリギリですけど何とか勝利することができました」

「じゃあ……ドレイクもカルデアに協力するつもりなのですか？」

「まあね。敗北しちまつたし、海の問題となりや、海賊であるアタシが黙つてられるはずもないしね」

なるほど…………つまりカルデアはこの時代の問題を解決するためにここにいると。じゃあ彼らについて行けば、私の問題も解決できるかもしれません。

「あの……もし良ければ、私も協力させてもらつてもよろしいでしょうか？」

「もちろん!!　俺たちも助かるよ」

「はい!!　わたしたちも協力してもらえると嬉しいです」

「では、私エリザベス一世は、その名に懸けて少しでも力になれるよう頑張りますので、よろしくお願ひします」

私は断られなかつたことに、一先ずホツとした。まだ私自身何ができるか分からぬけれども、それでも彼らについて行けば、何か新たに発見ができるかもしれないしね。

「それじやあ野郎ども！　新たに仲間になつた藤丸たちと姫様に――。違う、逆だ。新たに仲間になつたアタシたちと姫様に――。
乾杯だ!!」

「[[「かんぱーい!!」]]」

あれから私たちはドレイクの音頭もあつて、出港前の前夜祭を始めた。

最初はあれだけ批判してたマシユも、今はなんやかんやで藤丸と楽しんでいるみたいね。

さて、私はこのお祭り騒ぎに乗じてカルデアのサーヴァント達と交流しようと彼女たちの方に話かけました。

「改めて、私の名前エリザベス一世、ライダーのサーヴァントです。英國の女王をやつしていました。どうぞよろしくお願ひします」

「うむ。余はローマ帝国第五代皇帝、ネロ・クラウディウスである！此度はセイバーとして現界した。よろしく頼むぞ」

「私の名前はジャンヌ・ダルク、ルーラーのサーヴァントです。フランスで聖女として活動していました。よろしくお願ひしますね」

「私の名前はエミヤだ。しがない弓兵だが、よろしく頼むよ」

金髪で赤いドレスの少女がネロ、同じく金髪で旗を持っていた少女がジャンヌ、赤い外套を着た男性がエミヤですね。

どうやら彼女たちは、他の時代でカルデアと関わりがあるみたいで、その後、カルデアにサーヴァントとして召喚されたみたいね。彼らの他にもサーヴァントは居て、今はカルデア本部で待機しているらしい。

カルデアかあ。いつたいどんな場所なんだろう。聞いてる感じはとてもよさそうな所だし私も他のサーヴァントと仲良くなりたいけど、私が行けるかは分からぬしなあ。まあまだこれからどうなるかも分からぬし、今はこの機会を楽しみますか。

そう思いながら、私は夜が明けるまで彼女たちとの交流を楽しんだ。

第2話

「よし、野郎ども、出港だ！ 帆を上げろ、黄金の鹿号、出撃だ!!」
「「「「オー!!」」」

昨日の前夜祭が終わつて翌日、私たちはドレイクの船に乗つて海へと出た。

あー海はいいなあ。生きていた時は中々見ることも出ることもできなかつたし、久しぶりに見た海はやっぱり最高なんだけど……。

「ヒヤツハー！」

「女もいるじやねえか！」

「財宝も女も奪い放題だぜ！」

「チツ……空氣読めよ」

「エリザベスさん、今何か言いましたか？」

「ハツ！ いえいえ、何も言つてませんよ」

危なかつた……。つい女性として出しちゃいけない言葉が出てしまつた。ていうかなんでこんなに多くの海賊が出てくるかしら。海賊つて暇なのかしら、もつと他にも狙う船はあるはずなのに、なんでこの船ばかり襲つてくるのよ。何とか私は気持ちを落ち着かせて、改めて指示を仰ぐ為にドレイクの方に目を向けると、

「景気付けに一発、大砲ぶちかましな!!」

…………もう完全に戦う気満々じゃない。他の場所でも戦闘が始

まっているみたいだし。でも、そうなると私って何か戦う武器つて何があるのかしら。ネロたちは剣とか弓とか何もないところから出しているし、ジャンヌの旗は……あれは武器になるのかしら？ ネロたちができるなら私も何か武器を出せるかもしれないし……私の武器よ、出てきなさい！

そう呼びかけると私の左手の中には弓が握られ、腰には矢筒が現れていた。突然現れた弓と矢筒に思わず手を離しかけたけど、よく見たらこれ生前使っていた物じやない。

「……スース、ハー」

なぜこれが現れたのか分からぬけど、これなら私も戦えるわね。私の生前の経験と頭に浮かんでくる知識にそつて、ごく自然にこの弓に矢をつがえて構える。

「シツ！」

声と共に放たれた矢は、まるで相手に吸い込まれるかのように真っ直ぐ突き進んで行く。

放った矢が相手に当たったのを確認すると、既に構えていた二本目の矢を次の相手に向けて打つ。そうやって矢を打ち続けて最後の敵を倒すと、どうやら他の場所でも戦闘が終わつたみたいね。

手に持つている弓と矢筒をどうしようかなと私が迷つていると、まるで私の意思を汲み取つたみたいに光の粒子となつて消えてしまつた。えつ、消えちゃうの……。自分の武器が急に消えたことに驚いていると、私が倒した敵も全て光の粒子となつて消えてしまった。

「なあ藤丸にマシユ。ちよつといいかい？」

「はい。何でしようか？」

「倒した奴らが消えちまつたんだが、これはアンタたちから見てどうなんだい？」

「……確かに消えましたね。ドクター？」

敵が粒子となつて消えたことを私が疑問に思つていると、同じことを疑問に思つたのかドレイクが藤丸とマシューに問いかけていた。私も気になつてるので聞き耳を立てていたけど、それにしてもドクターワーつていつたい誰なの？

『あー、やつぱりか。この海域にいるのは海賊の概念みたいなものだろう』

「ひやつ！」

思わず声が漏れてしまつた私。ちょっと待つてよ、今の声は誰なのよ？ もしかしてドクターという人なの？ そんな人どこにも見当たらないじゃない。じゃあこの声はいつたいどこから喋つているのよ。

『おつと、そういうえば自己紹介がまだだつた。はじめまして、英国女王エリザベス一世。僕の名前はロマニ・アーキマン。皆からはロマンと呼ばれています。彼らのサポートを行つてゐる者です。よろしくお願ひしますね』

私がどこからともなく聞こえて声にとても同様していると、またどこからとなく聞こえてきた声が自己紹介をしてきた。なるほど、この聞こえる声の主がロマンという人で、とりあえず藤丸たちの仲間でカルデアの一員ということでいいのよね。

「それで、結局どういうことなんだい？」

「そうですよドクター。概念とは……いつたい？」

『「大航海時代」という舞台の記憶に刻まれた一種の靈体だ。役割を果たすためだけに動いている。自我はあると思うが、「平均的な海賊」の無限コピーとでも言おうか。害は小さいが、恐らくその世界を修復しない限り、無限に湧き続ける障害みたいなものだろう』

「……どうしたことなんでしょうか？」

「一言で説明すると、あの海賊たちは幽霊みたいなものです」

「……幽霊ですか。でも私の矢は間違いなく刺さりましたよ？」

「ああ、アタシの銃弾も効いたよ。アホウどもの銃弾もだ」

「失礼、言い直します。実体のある幽霊だと考えてください」

「あ、あるんですね実体。なら大丈夫です。なんの問題もありませ
ん」

「そうだね。実体があるんだつたらなんの問題もないね」

「ええ、その通りです。さあ、前進しましょう！」

とりあえず敵が倒すと、ああいう風に光の粒子となつて消えていく
ということね。でもそれって、私たちサーヴァントも死んでしまうと
同じように消えてしまつてことじやないのかしら……。

「本当にここに財宝があるのでしようか？」

「ああ、間違いないね。ここには何か財宝があるはずさ」

あれから私たちは、ドレイクの部下が見つけたという島に降り立つた。

ロマンが言うには島にはサーヴァント反応があるらしい。ていうかサーヴァントの反応って分かるものなのね。ということは私があの島にいた時には既に気づいていたつてことになるのよね。でも藤丸たちは気づいていなかつた。じやあ私はいつたいつ召喚されたことになるのかしら。

そんなふうに考えながら島に降り立つと、すぐにドレイクが森の方へ発砲した。えつ、なに。もしかしてもうサーヴァントが見つかったの。いくらなんでも早過ぎない。まだ心の準備も戦う準備もできていないのにそんなすぐ出てきちゃうの。

「何があつたんですか？」

「いや、何となく気配がしたから打つてみた」

「……普通何となくで打ちますか！」

「悪い予感がしたら銃声で打ち払う。生きるためのコツさ。まあどうなつちまつたのかちょっと見てくるよ」

マシユに対してもうとドレイクは森の方へ歩いて行つた。さすがドレイクね。マシユはあまりいい顔をしなかつたけど、ドレイクのあの勘のおかげで私がどれだけ救われたことか。スペインにケン

力を売った時も、アルマダ海戦の時も助けられだし。

「おーい！ちょっとこっちに来てくれよ」

森の方から呼びかける声が聞こえてきた。どうやらドレイクが打つた先に何か見つけたみたいね。

ドレイクはいつたい何を見つけたのかしらね。あの感じだと人ではないとは思うけど、まさかもう財宝を見つけてしまったとか。

あら、あれかしら……。何かの文字が刻まれた石版みたいだけどなんて書いてあるかまったく分からぬわね。さすがに英語でも日本語でも無さそうだけど、こんな文字言語にあつたかしら。……どうやらルーン文字という文字で書かれているみたい。血斧王……聞いたことのない名前ね。どうやら九世紀にノルウェーを支配していたヴァイキングの王らしいけど。というかただでさえヴァイキングってだけでも物騒なのに血の斧つていくらなんでも物騒過ぎないかし

——ゾツ

……突然感じた、この冷水を浴びたような、背筋が凍るような悪寒は……。

考えるよりも先に後ろ後ろを振り向くと、そこにはまるで呪われたような赤黒い巨大な斧を持つ、上半身裸の巨大な男が立っていた。

第3話

私は咄嗟に振り向いて距離を離そうとしながら、目の前の男について考える。さつきまで誰も後ろに居なかつたし何も感じなかつたのに、いきなり現れるつてことはこの男はサーヴァントつてこと？でもサーヴァントなら何かしら大きな反応が出るはずなのに、口マニアもさつきまで何も言わなかつた。ということはこの男はいつたいどこから現れ――

「姫様離れろ!!」

「グオオオオオオオオオオ!!」

ドレイクが叫ぶのと同時に、目の前の男は一瞬で距離を詰めてきてその手に持つ巨大な斧を私に向けて振り抜いてきた。

ヤバいやばいやばい！あんなの食らつたら間違いなく死んじやうんですけど！……いや、もしかしたら私の宝具ならあの攻撃を凌げるんじゃないかしら。うん！　いけるわ。ぶつつけ本番だから結構怖いけど、これに賭けるしかないものね。私は少しでも威力を減らせるように後ろに飛び、さらにそれでは足りないと剣を召喚して盾のよう両手でしつかり構えた。

男の斧と私の剣がぶつかった瞬間に一瞬で私の剣は壊れた。確かに私の剣は普通の騎士の剣だけどもうちよつと耐えてくれてもいいじゃない。思わず文句が出そうになつたけど、大きく吹き飛ばされたせいでそれどころじやないわ。とりあえず体を捻りながら何とか藤丸たちのところに着地する。

「大丈夫かい姫様！」

「そうですよ！ 大丈夫ですかエリザベスさん」

「……ええ、大丈夫ですよ。ほら」

「あれ、傷がありませんね」

「本当だね。いつたいどういうことなんだい？」

「それは……多分、宝具のおかげですね」

いやー本当に良かつた。ぶつつけ本番だつたから怖かつたけど、何とか凌ぐことはできたしね。というかこの宝具つて……あーなるほど……そつかー。まさか私のあれが宝具になるなんてね。私にとつては黒歴史でしかないんだけど。そう考えるとなんか恥ずかしいわね。

「いつたいどういった効果なのでですか？」

「マシユ、それは後で話しますから。それよりも先にあの男を倒しましよう」

私も宝具についてはちょっと考えたいけど、今はそれどころじゃないしね。

今あの男は私を攻撃した後、すぐに入れ替わるように攻めに行つたネロを相手取つていてる。あの男の攻撃をまるで踊つていてるみたいにスイスイ躲して、その隙に剣に炎を纏わせて攻撃している。ああ、ネロ超かっこいいわ。見た目は少女なのに、いざ戦うとあんなに相手を圧倒して凄いと思う。でも私もあんな風に敵を圧倒してみたいしネロみたいににこう……炎とか出して攻撃をしてみたい。炎とかどうやって出しているのかネロに聞いたら教えてくれるかな……。

というか、あの男さつきから「ガガガ」とか「グギギ」とか「コロ

「スツ」としか言つてないじやん。あんな見た目が悪すぎる斧を持つてから普通じゃないと思つてたけど、目も黒く染まつてるし、本当に何かに呪われてでもいるのかしら？」

このまま彼女だけで終わりそうな雰囲気だったんだけど、突然空気が重くなつたかのように雰囲気が変わつた。私が見た時には、あの男の斧に何かが集まつてゐるかのように見えて……

『ヤバい、宝具が来るぞ！』

ロマンの声が聞こえた瞬間、あの男が突如もの凄い速さでネロを攻撃し大きく吹き飛ばして いた。さらに速さが上がって私の方に向かつてくる。

なんで私なのよ！ もつと他にもいるでしようが！ まさかこの中で私が一番弱そうに見えたつてことなの。確かに貴方には一度吹き飛ばされたし、この中で見たら巨大な盾も、弓も、旗も、何も持つていなけれど、さすがに舐め過ぎじゃないかしら。いいわ、見せてあげる。この私の実力を！

腰を深く落として足をしつかりと地面につける。手は力を抜いて軽く構えてあの男の攻撃に備える。男の斧が当たつた瞬間、私は体が受けた衝撃をすべて地面に逃がしながらその反動を活かして踏み込む。そして……

「吹つ飛べ！」

私が一切傷つかずに吹き飛ばないことに戸惑う男に、腰を捻りながら全身の関節を連動させて、全ての力を込めた一撃を打ち込む。

「ギ、ギ、ギ、……。ガガガツ、ワタサネエ、アレハオレノモノダ……！ オレノ、モノ、ナノニ……」

吹き飛んだ男はさすがに力が尽きたのか、何かを言い残して倒れながら起き上がる事もなく、足の先から光の粒子になつて消えていった。

「…………あの、エリザベスさん」

いやーやっぱり最高だな。久しぶりに殴つたからちょっと威力は落ちてるけど、それでもしつかり効いてるみたいだし。また練習しないとなあ……。

「えつと…………何でしようか、マシユ」

「いえ、その…………さつきの一撃と傷を負わなかつたことについて聞いてみたくて」

「そうですよね。さつきの一撃は…………その…………護身術です」

「「「護身術!?!」」

「ええもちろん。貴族たるもの、最後はやはり自分の力で身を守らないといけませんから。ええ自分の力で」

あながち嘘じやないだよねこれが。女王として生きていた時は暗殺なんて日常茶飯事だつたから、騎士だけじゃあ守りきれなくて私自身で対処することも多かつたし。でもまあ正直なところ私の男だつた頃の経験だつたから、言わなくてホツとしてるんだけどね。あまり追求されると、ついボロを出してしまいそうになるし。

「では、攻撃を受けても無傷だつたのはいつたい何なのでしょうか？」

「……それは私の宝具が関係してますね」

「宝具ですか」

「私の宝具の一つ、処女女王のおかげですね」

処女女王

私の宝具の一つで、多分私の中で一番の象徴である宝具もある。というかこの宝具の由来は私にとつてある意味黒歴史なのよね……。

「処女女王の効果は主に二つ。一つ目は私に対して全ての精神的異常を無効にすること。二つ目は男性によるすべての攻撃を無効にすることです」

「……つまりさつきの攻撃もすべて」

「ええ、この宝具の効果によつて無効となつていきました」

この宝具の由来は私が生涯一度も結婚しなかつたことから来ているのだけど、私が結婚しなかつた理由が、当時の政治的な理由はもちろんあつたけど、それ以上に同じ男と結婚したくなかったからなのよね。当時はまだ精神的には男性部分が多くつたから。しかもあの時代は変態が多かつたし、権力を握れる女王の夫の座を狙つて毎日毎日婚約の誘いが来るわ来るわ。あれは本当に地獄だつたわね……。

「とにかくそのような感じですね。正直なところ、何か攻撃的な道具の方がよかつたです」

「でもエリザベスは弓とか剣を使いこなしていたはずだけど」

「藤丸……。そうですね、あれは私の生前の経験と女王特権というスキルによつてできたことです」

「なるほど」

「む……。それは余の皇帝特権と何が違うのだ？」

「それは…………。多分、名前の違ひじゃないでしようか。ネロは皇帝でしたし、私は女王でしたから」

「うむ。確かに余は皇帝であるし、エリザベスは女王であるからな」

これもちよつと違うんだけどね。私のスキルである女王特権は、ネロの皇帝特権に私が男だった頃の経験と知識が加えられた、ある意味私専用のスキルという感じなんだから。でもまあ、いくらなんでも女王特権は安直すぎじやないかしら。

「とりあえず私の宝具とスキルはこんな感じです」

「なるほどな。とりあえず私の攻撃も効かないということか……」

「それは…………そうですけど、エミヤは私のことを攻撃するつもりですか？」

「そうするつもりはないが…………一応」

「……一応ですか」

「何よ、エミヤは私を打つかもしれないってこと？　冗談じやないわ。エミヤの攻撃つて剣を矢みたいに打つし、しかもその剣が爆発するから正直効かないって分かつていても怖いんだから。とりあえず

藤丸を裏切らなければいいのかしら？

「それよりもさつきの男が言っていた”モノ”とはいつたい何なのでしょうか」

「さあね。でもまあ間違いなくお宝だろうね？」

「そうですね。さあ、行きましょう！」

今思つたんだけど、あんなに静かについて注意してたマシューが一番はしゃいでないかしら。

第4話

エイリーグを倒した私たちは彼の船で見つけた海図を頼りに次の島に向かい、ロマンの提案で拠点を作るためにこの島で探索をしていた。

それにしてもこの島に着いてからさらに驚くことが増えたわね。竜の骨？でできた骸骨の兵士だつたり、ロマンみたいに姿は見えないのに話しかけてきたダヴィンチちゃんがつたり。ドレイクもそうだけど胡椒をあんな瓶いっぱいに詰めた物を渡してくるなんて驚くに決まってるじゃない。

それにダヴィンチと言えば本当は男じゃないの？ そういえばネロも本来なら男のはずなのに女の子だし。いや別にいいのよ。ネロはなんたつてかわいいしね。

それにしてもさつきから何か感じるのよね。こうピリッとした感じっていうか……。

「きやつ!?」

「きや、地震……!？」

「伏せな、かなり大きいよ！」

次の瞬間、まるで島全体が揺れているみたいな強い揺れが襲つてきた。思つたよりも大きくてドレイクの言葉がなかつたら危なかつたわね。

「……収まつた、みたいです。それにしてもこの地震はいつたい何なのでしょうか。ドクターとの通信も途切れてしましましたし」

「さあね。ただ、置いてきた船や部下が心配だ。一旦戻つてもいいかい？」

「そうですね」

マシユたちの方を見てみると、どうやらマシユたちも大丈夫みたいね。

それにしてもよりもよつてこのタイミングで地震？ 絶対何があるじゃない。

もしかして私が感じたのはこれのことだつたのかしら。

それよりもドレイクが言う通り船と置いてきた仲間が無事か心配だし、一旦戻らないとね。私たちは急いで船のある沖に戻った。

どうやら船に異常はないけれどまつたく動かないらしい。藤丸たちによるとどうやら魔術によつて結界が張られていて、結界を張つた何者かを倒さないと永遠に脱出できないみたいね。

というわけでその何者かを探しているんだけど、岩や謎の人工物ばっかりで人一人見当たらないのだけど。なんでこんな所に人工的な建物があるのかしらね。

あら、マシユたちが何か見つけたみたい。これは……穴かしら。どうやらこの中を調べるみたいだけど大丈夫なのかしら？

穴の中は思つていたよりも広くて綺麗で、上にあつたものと同じで
どことなく人為的な感じがするわね。

「これは……」

「地下迷宮^{ダンジョン}つてやつかい。いいねえいいねえ、海賊の血が滾るつて
もんだ」

「地下迷宮^{ダンジョン}……ですか」

これが地下迷宮^{ダンジョン}というやつなのね。初めて訪れたけど、こう冒険し
ているつて感じるからなんかいいわね。

そんな風に思いながら、襲つてくる敵を倒しながら勘を頼りに先に
進んでいくドレイクについて行く。

あら、マシユと藤丸が手を繋いでるじゃない。お互に恥ずかしそ
うに顔を赤くさせて初々しいわね。

……この状況なら私にもチャンスがあるかもしれないわね。

「あの、ネロ。私と……その……手を繋いでくれませんか？ 私
…………」ういうの初めてなので、その……心配というか

「うむ、いいぞ！ 余の手をしつかりと握るがいい。なに、心配する
な。余は一度体験しているからな。大船に乗つたつもりでいるがい
い」

さすがネロね、カツコよすぎるわ。手もちつちやくてスベスベだ
し、あんなカツコいいことも言つてくれるし、もう惚れ直しちゃう
じやない。

「マシユたちも姫様もあんまりイチャイチャするんじゃないよ。
……それよりもさつきから臭うな。血の臭いがする」

「本当ですか」

「……ま、商売上どうしても嗅ぎ慣れるからね。こういうのは。それよりも見てみな。血が点々と向こうの方に続いている。傷 자체はそれほど大きくなさそうだね」

「もしかしたら誰かが怪我をしているのかもしれません。治せば事情も聞けるかもしませんし、唯一の手掛かりになるかもしれません。追ってみましょう!」

結局血を流した人は居らず、人外の敵が襲いかかってくるばっかり。正直人が居なかつたことよりもネロと手を離すことになつてしまつたことに対する怒りしかない。

「死ねつ！　死ねつ！　死ねつ！」

「あの……エリザベスさん。その、大丈夫ですか」

「……ええ！　大丈夫です。特に問題はないですよ」

ええ、特に問題はないわ。問題は。ただもうちょっとタイミングつてものがあるじやない。せつかく手を繋げたのに全然堪能できてな

いし……。

「……ッ！ 止まりな！ 嫌な感じがするね。何か来るよ……！」

「この反応は……サーヴァントです！」

その声が聞こえた瞬間身構えると、目の前に一体のサーヴァントが現れた。全身傷だらけの体はとても大きく、牛のような頭に仮面を着け、両手には身の丈ほどある巨大な斧を持っている。

「で、でかつ……!? 何だいコイツ……！」

「……私の二倍以上ありそうですね」

「そんなこと言つてる場合ではありませんよ！ 来ます！」

「……しね。このあすてりおですが、みな、ごろしに、する……！ これから、さきへは、いかせない……！」

「血斧王エイリーケと同じバーサーカーですか……！ 皆さん、気を付けて下さい。アステリオスとは隠された本名であり、一般的に知られている彼の名は『ミノタウロス』。ギリシャ神話に伝わる怪物の一人です！」

次の瞬間、目の前の男が私たちに向かつて両手に持つている斧を振り下ろす。その攻撃はマシュが大盾で防ぎ、その隙にネロとドレイクが攻撃する。ジャンヌは後ろで藤丸を守れるように備えていて、私とエミヤが弓で援護していく。

「そんな……!? これだけ攻撃しているのに……！」

「あんだけ鉛玉を喰らつてまだ生きてんのか！ 大食漢にもほどがあるだろ！」

「……やれやれ。これでも本気で攻撃しているのだがな。 こうも耐えられるといやはや、自信を無くしてしまいそうだ」

「ま……もる……！ まも……らな……きや……！」

ネロの剣が、ドレイクの弾丸が、私とエミヤの矢が少しずつその体にダメージを負わせているはずなのに、相手は一向に止まる気配がないんですけど。それどころかドンドン攻撃が苛烈になつていいくなんてどれだけタフなのよ。

それでも向こうもボロボロだし、最後の一押しで皆が宝具を使おうとした瞬間——

「わかつた、わかつたわよ！ 私がついていけばいいんでしよう！ 煮るなり焼くなり、好きにすればいいわ！ ほら、さつさとしなさいよ。アステリオスはもう瀕死だし、もしコイツが死んだら、迷宮が崩壊する可能性があるのよ？ だからさつさと連れていきなさい。"アイツ" のところへ」

アステリオスを庇うように現れたのは、一人のサーヴァントだった。私はそのサーヴァントを見た瞬間衝撃が走った。なんかマシユとドレイクが言われて落ち込んでいるみたいだけどまつたく気にならなかつた。

突然だけど、私は子どもと美少女が大好きだ。

みんなも知つてゐる通り、私が生きていた時は周りには問題や敵が多かつた。というか多すぎたのよ。

そんな私の唯一の癒しが子どもと触れあうことだったの。私の弟であるエドワードはお姉様、お姉様って言つて頼つて来てくれたし、私が建てた孤児院の子どもたちは私のことを女王じやなくて一人のお姉ちゃんとして接してくれたからなあ。もちろんロリコンでもショタコンでもないよ。本当よ。

美少女の方はなんと言つうか……タイプなのよね。いやロリコンとは違うわよ。でも私が生きていた時は周りにいた同年代の女性も年上の女性もほとんど敵だつたし、でも男として同じ男性は無理だったから、必然的に年下の少女しかいなかつたのよ。

だからネロのことが一番大好きよ。一目惚れというか何か惹かれるものがあったのよね。でも目の前の少女もかわいいのよね。紫髪のツインテールもそうだし、あのツンデレっぽい態度もかわいいし。

「ちよつと、あなたも何か言いなさいよ！ 女神エウリュアレである私の言葉を無視するつもり？」

「……エウリュアレちゃん可愛すぎませんか」

「そ、そう……！ まあ私は女神だしかわいいのは当たり前だけど、そこの二人よりも見る目があるわね」

「抱きついてもいいですか？」

「ダメよ。私は女神だし、そんな簡単に……。ちよつと、言つてる途中で抱きつかないでよ！ ……だからやめなさいよ。ああもう、頭も撫でないで！」

いやーかわいいな本当に。ネロだと緊張しちゃうけど、なぜか彼女

は緊張しないのよね。今のうちに美少女を堪能しておかないと。

「あの……エリザベス、そろそろいいかな？　ちょっと話が進まないというか……」

「そうよ、そこの人間の言うとおりだわ！　だからさつさと離なさいよ」

「……すみませんでした。つい……」

あーあ離されちゃった。まあさすがにこのタイミングは悪すぎたわね。それでもなんとか美少女成分堪能できだし、しばらくは大人しくしていないとね。

私が離れてからはあれよあれよと話が進んでいった。どうやらエウリュアレとアステリオスは誰かに襲われていたらしい。その敵から身を守るために結界を張つていたみたい。でも敵の仕業と勘違いした私たちが攻めてきたからアステリオスが出てきたってわけね。

なんとか誤解も解けたみたいだしどうするのかなって思つてたけど、ドレイクは一人を連れていくつもりみたいね。もちろん私は贊成よ。エウリュアレはもちろん、アステリオスもよく見たら子どもっぽくてかわいいし。

マシユはちょっと嫌な顔をしているし、エウリュアレは注文が多いけど、まあ騒がしくなつて楽しくなりそうよね！

第5話

エウリュアレとアステリオスを仲間にした私たちは結界を解いてもらい、次の島に向けて海に出た。

エウリュアレもアステリオスもドレイクの部下に無事受け入れられたし、天気は快晴で波も無くていい日和だし、今日はいい一日なりそうね。

…………今思えばあの時あんなことさえ思わなければ、こんなことにはなつていなかつたかもしないわね……。

あれから私たちは襲いかかってくる海賊を蹴散らしていきながら、順調に次の島まで進んでいた。

でもドレイクが言うには、日が沈む頃には嵐になるかもしないらしい。あーあ、せつかくのいい天気なのに残念だなあ。

そんなふうに思っていると、まるでそんな思いを払うかのようにエウリュアレちゃんが歌い出した。

その歌声はとても澄んでいるみたいに綺麗で、私は聞き入りながらどうしてもやつてみたいことができた。

「やつぱりいいねえ。綺麗な歌は癒されるわー」

「……本当に綺麗な歌ですね」

「あら、あなたたちには聞いていいと許可を出したつもりはないけど？」

「いいじゃないか。意地悪なんて言わないでくれよう」

「……あの、エウリュアレちゃん。よかつたらですけど、私のヴァイオリンと合わせてもいいでしょうか？」

「んーどうしようかしら？……まあいいわ。そのかわり、失敗なんてしないでよね」

「ええ、もちろんです」

許可を貰つてヴァイオリンを呼び出すと、彼女が歌い始めるのに合させて私も弾き始めました。

なるべく彼女の歌の邪魔をせずなおかつ引き立てるように意識して弾くのは難しいけれど、美少女の歌を引き立てていると思うとやる気が出るのよね。

「……すごい綺麗です。エウリュアレさんの歌声もそうですけど、エリザベスさんのヴァイオリンも凄いと思います」

「うむ。さすが女神とエリザベスといったところか。余も歌いたくなってきたぞ！」

「それはダメだよ」

「マスターの言う通りだ。今は彼女たちの歌をしつかり聞くべきだろう……君の歌はあまり上手いとは言えないからな」

エミヤがなんか不穏なことを呟いているのだけれど。ネロにも苦手なことがあつたのね。いいわね！ そんなところがあつてもネロは素敵よ。

そんなことも思いながらなんとか演奏を終えた。周りからものすごい喝采が聞こえてきて、成功したんだなどホツとする。

「あなた、意外とうまいのね。いいヴァイオリンだつたわ」

「ありがとうございます。私もエウリュアレちゃんと一緒にできて嬉しいです」

本当によかつたわ。やっぱり歌が上手い人と合わせるのは楽しいわね。しかも美少女だし！

そんなことを思つていると、マシユがエウリュアレちゃんになんで追われているのかを聞いてた。さすがマシユね、切り替えが早すぎるんじゃないかしら。

エウリュアレちゃんによると、どうやらその可愛さを狙つて特別ヘンタイな奴らに追つられてみたいで、しかも追つていた奴らは海賊のサーヴァントで、その中でも世界最強に気持ち悪かつたらしい。

……許せないわね。こんな可憐なエウリュアレちゃんを襲つたサーヴァントなんて。しかも変態ですつて！ やっぱりいつの時代でも変態は最悪ね。もし出会つたらすぐに駆除しないとね。

あれからさらに先に進むと、前方に一隻の海賊船が現れた。どうやらあれがエウリュアレちゃんを襲い、さらにはドレイクの船を追い回していた海賊みたい。

マロンとマシユによると史上最高の知名度を誇る海賊で、名前をエドワード・ティーチというらしい。とはいえた私は知らないから多分私がより後に活躍した人なのだろう。

向こうの船の甲板にいるのは四人。緑色の服を着た槍を持つ男性、赤いコートを着たグラマラスな女性、その隣には黒いコートを着た小柄な少女、そして彼らの前に立っている黒髪と右手の鍵爪が特徴的ないかにも海賊つて感じの男性。多分だけど一番前に立っている男がエドワード・ティーチつてやつね。

ドレイクは今までの鬱憤を晴らせると思つたのか、目の前の男に叫んでいるし。でも次の瞬間ありえない言葉が聞こえたのよね。

「だーかーらー！ BBAはお呼びじゃないんです。何その無駄乳、ふざけてるの？ まあ傷はいいよ？ イイよね刀傷。そういう属性はアリ。でもね、ちょっと年齢がね、困るよね。せめて半分くらいなら拙者許容範囲内でござるけどねえ。ドウルフフフ！」

……今なんて言つたのかしら。よりもよつてドレイクをBBAですって！ まつたくわかつてないわねあの男。あの全てを包み込んでくれるような大きな胸がいいんじゃない。年齢もドレイクの歳でBBAなら、七十近くで死んだ私は一体何になるのよ！

だからドレイク大丈夫よ。あんなやつの言うことなんか気にしないでいいのよ。私も皆もあなたの素敵なところ分かつてるから。ほら、……あーよしよし泣かないで。

私たちがドレイクを励ましていると、ティーチは次にエウリュアレちゃんに向かつて変態発言をしていた。エウリュアレちゃんは引いているけど、そつちはアステリオスが前に立ちはだかつて庇つていた。

ナイスよアステリオス。そんな変態の視線なんてエウリュアレちゃんに向けさせてはダメよ。だからエウリュアレちゃん、こつちに来てジヤンヌたちとドレイクを励ましてくれないかしら。

「……ん？」

「……む」

「……つ!?」

エウリュアレちゃんをこちらに避難させていると、あの変態、いよいよ私のネロとマシユの方に目を向けてきた。

奴が変態的な視線を向ける前にネロとマシユの間に体を滑り込ませて奴の視線から庇いながら奴の反応を伺う。

「……すいません。私の仲間に変な視線向けないでもらえませんか」

「んー……んー、んーんー…………○——マル！ ○——マル！ ごーかー

く！ てれててつてれー！」

「……ツ!?」

「ひやつー！」

「イヤー片目メカクレ系もわがままボディな美少女もいいでござるけどお、やつぱりい、いかにも王女つて感じがいいでござるなあ。こう……薄い本的な感じで」

「ひつ!?」

「ともかくそこの鯖たち、名前を聞かせるでござるよ。さもないと……今日は拙者、キミたちの夢を見ちゃうゾ♪」

「エ、エリザベス一世と申します！ ライダーのサーヴァントをしています！」

「マシユ・キリエライトと言います。デミ・サーヴァントです！」

「余の名はネロ・クラウディウスだ。セイバーとして現界している」

「エリザベス……エリザベス……エリー。マシユ……マシユ……マシユマロ。エリエリマロマロ……なんてIN—美……ボフデュルフフフ」

あまりにもの気持ち悪さに思わず後ろにいたネロに抱きついてしまった。急に抱きついた私に驚いたみたいだけどしつかり抱き返してくれたわ。フフフ、さすが私のネロね。あの変態の言葉にも動じていまいみたいだし、私をしつかりと受け止めてくれたし、本当にイケメンすぎるわ！ もちろんネロは美少女だけどね。

私がネロに抱きついて癒されていると、なんとドレイクが急に砲撃を始めていた。立ち直つたみたいでよかつたけど、そんないきなり戦いを吹っ掛けるなんてよっぽどイラついていたのね。

断腸の思いでネロと離れた私は、弓を召喚して乗り込んでくる海賊

やネロたちの援護を始めた。

ただでさえイライラしているのに、あの変態の部下が攻めてくると思ふと力が入っちゃつても仕方がないわ。

そうやつていつも以上に敵を打ち倒していくと、敵の一人である槍を持った男が藤丸たちの方に向かっていくのが見えた。動きを止めつもりで矢を放っているけれど、全部躱すか槍で叩き落とされてしまう。

チツ、あの男中々やるわね。弓じや援護できなさそудаし、剣の方が良さそうね。

武器を弓から剣に持ち替えると、今まさに藤丸たちに攻撃しようとしている男に仕掛ける。

「失礼しますね。あなたも紳士なら少年少女を狙うべきではありますよね」

「……うーん、オジサンは紳士というよりかは戦士だからねえ。あまりそういうのは気にしないんだけど」

「……なら仕方があります。全力で相手をさせてもらいます！」

その言葉と共に私はさらに力を込めて剣を振るう。宝具の効果を利用して防御は最低限に、相手に隙を与えないように攻撃し続ける。けれども、相手はその全ての攻撃を捌きながら逆に攻撃を仕掛けてくる。……なんか全力じゃなくて余裕そうでなんかムカつくわね。

「……つと、まさかここまで耐えるなんてねえ。オジサンの攻撃も効いていないみたいだし。いやはや、傑作だ。一体全体どんなサーキュアントなのやら。ま、この程度で潰れるようじや、生かしておく価値もない」

「……ッ！ それは一体どういう……」

「せいぜい頑張りな、お嬢さんたち」

そういうと男は瞬く間に去つていった。ひとまず藤丸とマシューが無事でよかつたわ。……それにしても終始余裕そうにして本当にムカつくわねあの男。でも確かに実力は本物だつた。そしてあの発言……何か裏がありそうね。

そんな感じで考えている間にも、ドレイクの指示によつて私たちはあの変態の船からなんとか撤退しました。